

【指定テーマ2 海事教育の現場から】

《活動報告》

南陽市海洋キャリア教育セミナーの報告

—内陸部での海洋教育の導入と実践—

後藤 祐希

(東京海洋大学大学院生)

猪野 忠

(前山形県南陽市教育長)

目 次

1. はじめに
2. 南陽市海洋キャリア教育セミナーの概要
3. 南陽市における海洋教育の位置付けと教育的役割
4. 今後の課題と展望
5. 結びにかえて

1. はじめに

山形県南陽市教育委員会では（公財）日本海事広報協会、東北運輸局、東京海洋大学海事普及会をはじめとする多くの海事関係者の協力を得て、中学2年生を対象とした「南陽市海洋キャリア教育セミナー～海の仕事へのパスポート～」を毎年夏に開催している。本セミナーは人々の生活に密接に関係する海洋の重要性への理解を深め、併せて職業や上級学校といった自らの進路に関する知識の幅を広げることを目的としており、生徒たちは海に関わる仕事の第一線で活躍する実務者を講師に招いての講演会や海洋分野に関する調べ学習及び新聞製作に取り組んでいる。平成28年の初開催以来、平成30年までの3年間で中学生約1,100人が本セミナーを受講し、生徒たちは普段目にする機会の少ない海洋への関心を深めている。

南陽市は東に奥羽山脈、南から西にかけて吾妻山系と飯豊山系に囲まれた置賜盆地の中心にあり、県内唯一の国際貿易港である酒田港まで157km、最寄り新潟県の日本海や宮城県の太平洋まで約80km、海に行くにも車で2時間以上かかる内陸の市である（右地図参照）。本市での海洋教育は、平成27年8月に開催された東京海洋大学海事普及会の学生を招いての海事講演会が発端となり始まったものである。本稿では海洋キャリア教育セミナーの概要、並びに本市学校教育における海洋教育の役割と課題について紹介する。なお、本稿の執筆者・後藤は本セミナー立ち上げ当時の東京海洋大学海事普及会の代表であり、猪野は本年3月の退任までその運営を主



(南陽市 HP より)

導してきた当時の本市教育長である。

2. 南陽市海洋キャリア教育セミナーの概要

2. 1 セミナーのねらい

「南陽市海洋キャリア教育セミナー」は本市教育委員会・日本海事広報協会・海事普及会の3者を中心に企画立案され、下記に掲げる2点を学習のねらいと定めている。

＜南陽市海洋キャリア教育セミナーのねらい＞

1. 海に接する機会の少ない本市の生徒たちが、海洋に関わる職種や教育機関等を知ること、職業に関する知識の幅をもつことができる。
2. 人々の暮らしと密接に関係している海洋の重要性を現実的に知り、それを自己が現在学んでいることと結び付けて未来に活かそうとする。

南陽市では「生徒の職業に関する視野を広げること」「生徒が自身のキャリアパスについて考えること」を重視しながら、「海に接する機会の少ない子供たちに、日本における海的重要性とその魅力を伝えること」を目指し、本セミナーをキャリア教育の一環と位置付けて実施している。また海に関わる仕事についての学習を通じて、生徒自身が普段、学校で学んでいる教科と実社会との関連性を感じ、「意欲的に学ぼうとする態度」と「社会や他の人々と関わり合いながら自らの未来を切り拓いていこうとする態度」が培われることを目指している。

2. 2 事前学習

南陽市における海洋教育は3つの段階で構成されており、生徒たちは事前学習とセミナーを受講した後、新聞作成に取り組む。

(図1参照)

セミナーに先立つ6月から7月にかけて各学校に学習資料を配布し、自分たちの生活と海との関わりや海に関わる職業について事前学習を行っている。この際には、日本海事広報協会とセミナー当日に各職業ブースを担当する講師に作成して頂いた事前学習

資料を使用している。事前学習資料には、海と日本についての基礎知識や海に関わる職業の仕事内容のほか、それらの仕事に就くまでの過程や学校、必要な資格、仕事の魅力などを実務者からのメッセージという形で紹介している。(図2・図3参照)

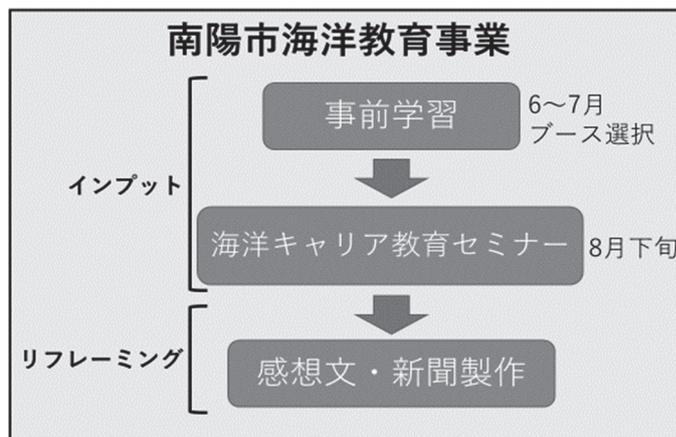


図1 海洋教育事業の構成

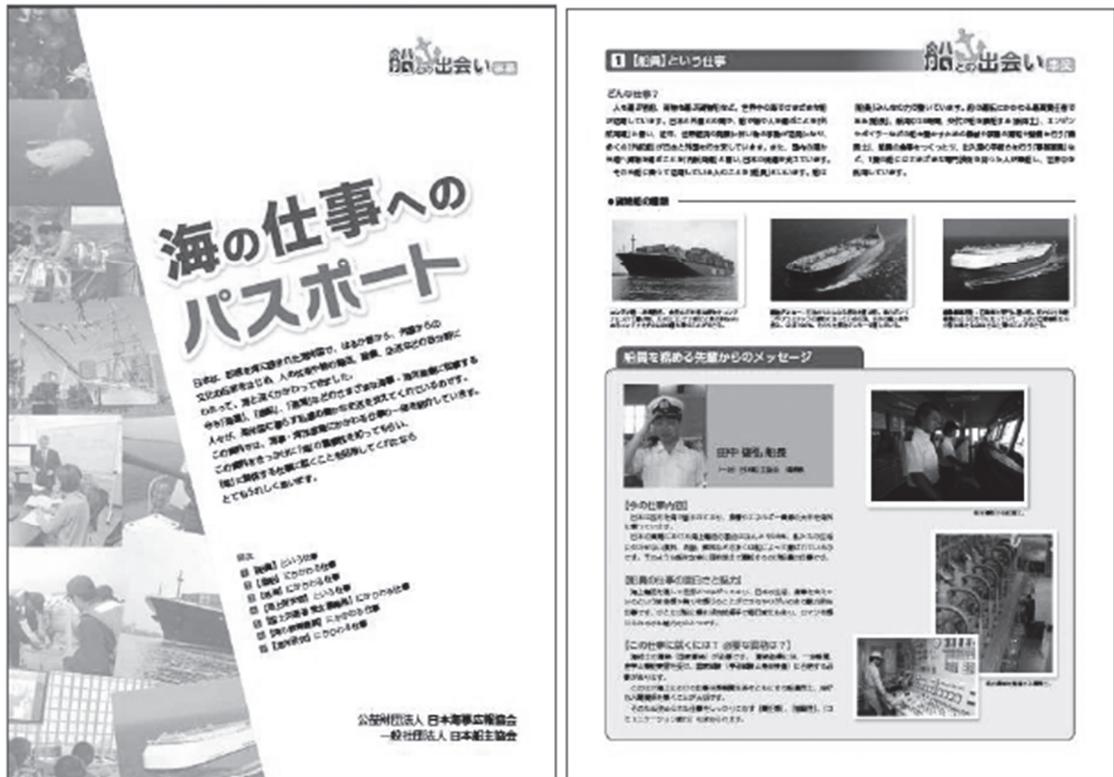


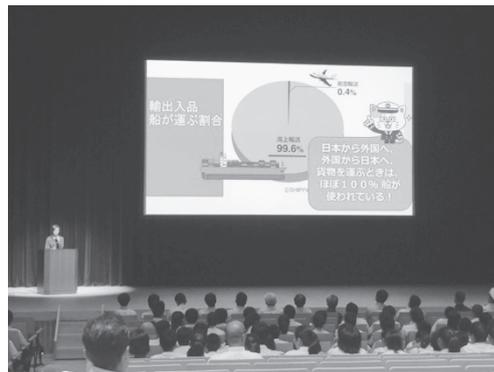
図2 事前学習資料 2016年版



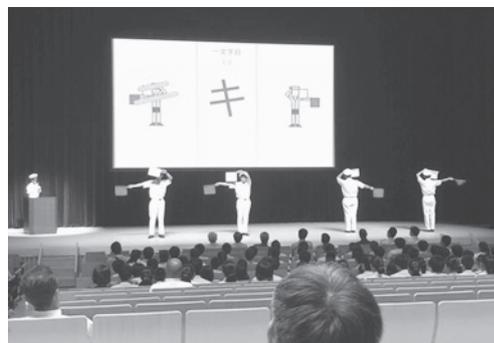
図3 事前学習資料 2017年版

2. 3南陽市海洋キャリア教育セミナー

「南陽市海洋キャリア教育セミナー～海の仕事へのパスポート～」は夏休み明けの8月下旬、南陽市文化会館「シェルターなんようホール」を会場に、市内全中学校（赤湯中学校、沖郷中学校、宮内中学校）の2年生約250人が一堂に会して開催される。開会に先立つオープニング・アクトとして、日本海事広報協会と東京海洋大学海事普及会から海の基礎知識と手旗信号による海上での通信手段についての講演を聞いたのち、生徒たちは各ブースに移動し分科セミナーを受講している。分科セミナーには海に関わる7つの職業ブースを設け、生徒たちは学習資料や事前学習で興味を持った職業を2つ選択して、40分間の講演会や交流会に参加する。セミナーでの講演と設置した職業ブースは以下の通りである。



日本海事広報協会による海の基礎講演



海事普及会の手旗信号クイズ

(1)オープニング・アクト：海と日本の基礎講演
手旗信号クイズ

(2)分科セミナー：40分×2コマ

- ①「船会社/船員の仕事」（一般社団法人日本船長協会）
- ②「安全な船が出来るまで」（株式会社ヤマニシ）
- ③「港の役割・仕事について」（酒田海陸運送株式会社）
- ④「海に関わる公務員の仕事について」（国土交通省東北運輸局）
- ⑤「海上保安官の仕事」（海上保安庁第二管区海上保安本部酒田海上保安部）
- ⑥「深海の世界へようこそ～有人潜水調査船『しんかい6500』の1日～」（国立研究開発法人海洋研究開発機構）
- ⑦「東京海洋大学で学べること」（東京海洋大学海事普及会）

※各職業ブースの人数は40名前後になるよう調整。

海を目にする機会の少ない本市の中学生が海洋や海の仕事について、より現実的な理解を深められるよう、本セミナーでは視聴覚教材の使用、また制服や作業着等の仕事着を着用して講演を行って頂くなどの工夫を、各講師にお願いしている。以下において各職業ブースでの講演内容や工夫を紹介する。

○「船会社/船員の仕事」: 日本船長協会から外航船の現役船長を講師に招き、海運の果たす役割と船員の仕事について学習する。制服を着た船長からは外航海運が果たす役割や船内職制についての解説のほか、船の種類、海外の運河について船長自身の経験を交えた講演を頂いている。また、船員の仕事や船内生活について話が及ぶと、生徒からは「海賊が襲ってきたらどのように対処するのですか?」「飲み水やお風呂の水は海水を使っているのですか?」「外国人の乗組員とどのように仕事をしているのですか?」と活発な質問が上がり、船長は船内での工夫について紹介したほか「これからの社会では英語の勉強が必須です。」と生徒たちに呼びかけた。



「船会社/船員の仕事」

○「安全な船が出来るまで」: 東北運輸局の協力を得て、宮城県石巻市で造船業・船舶修理業を営む株式会社ヤマニシの技術者の方にお越し頂き、造船・修繕といった造船所の仕事や造船で用いる力学について学習する。特に船舶算法の説明では豊富なスライドを用いて重力、浮力、復原力について中学生でも理解できるような平易な解説を頂いている。参加した生徒からは「船が直立していられるのは重力のおかげだと知って驚きました。」との感想が寄せられ、学校での学びと実社会との繋がりを実感しているようであった。



「安全な船が出来るまで」

○「港の役割・仕事について」: 酒田港で港湾運送・荷役・通関・倉庫業を営む酒田海陸運送株式会社の方に講演頂いている。酒田港は江戸時代に河村瑞賢が開拓した西廻り航路の起点として栄え、400年経った現在でも「東方水上シルクロード」やリサイクル貨物の拠点港として、山形県の経済・暮らし・文化を牽引する極めて重要な存在である。本ブースでは、酒田港の取扱貨物（石炭、工業塩、穀物）やコンテナ海上輸送についての解説を聞いたのち、同社が運用するガントリークレーンの操縦席から撮影した臨場感あふれる映像を見ながら、実際のコンテナ荷役の様子と港湾の仕事について学習する。荷役の動画を観た生徒からは「私が想像していたものより大規模な作業でした。」「機械を操縦する人、合図を出す人、サポートする人など、沢山の方が協力し合うことで成り立つ仕事だと思いました。」などの感想が寄せられている。



「港の役割・仕事について」

○「海に関わる公務員の仕事について」: 国土交通省東北運輸局海上安全環境部から首席海事技術専門官の方をお招きし、船舶検査官・船舶測度官の仕事内容と船が出来るまでの流れについて説明を頂いている。船舶検査官・船舶測度官に就くまでの過程について、中学

校卒業から国家公務員試験・入省までの流れを教えるほか、生徒の「どうして重い船が水に浮けるのですか？」という質問には、紙粘土と水の例えから浮力の原理について解説して頂くなど、生徒たちは力学の応用と進路の考え方について学習している。

○「海上保安官の仕事」：酒田市の海上保安庁酒田海上保安部の海上保安官から、海上保安官の任務の説明と体験教室を行って頂いている。違法船舶の取締りや海難救助などの海上保安官の仕事を動画で紹介頂いたのち、生徒たちはグループ毎に 3D 海図とロープワークを体験している。

○「深海の世界へようこそ」：(国研) 海洋研究開発機構から「しんかい 6500」の操縦士や海洋研究者など毎年多彩な方々を講師に招き、海洋研究や研究者の仕事について学んでいる。「しんかい 6500」から撮影した深海の映像を見せてもらいながら、最新の地震研究や深海生物の生態について紹介して頂く。深海魚の姿や神秘的な熱水噴出孔の様子に生徒たちは強い興味を示していた一方で、深海底に散乱するビニール袋の写真を目にして、人間による海洋汚染の深刻さを感じているようであった。これらに加え、本ブースでは研究者として海洋研究・開発に携わるために必要なキャリア(大学や大学院進学など)についても併せてご説明頂いている。

○「東京海洋大学で学べること」：東京海洋大学海事普及会の学生たちが毎年講師を務め、グループに分かれての学生交流会を展開している。海洋大生が作った動画やスライドを見ながら、大学の授業内容や練習船実習での様子、学生生活について後輩と会話をするかのように教えてもらっている。生徒からは「受験勉強は大変だった?」「女性でも船に乗れる?」「練習船のご飯は?」「将来どのような仕事に就くのですか?」「船酔いしないの?」など次々と質問が出され、本セミナーの中でも特に交流の盛んなブースとなっている。本市には大学や専門学校がないため、生徒の中には大学生と接する初めての機会



「海に関わる公務員の仕事について」



「海上保安官の仕事」



「深海の世界へようこそ」



「東京海洋大学で学べること」

となった者も多い。生徒たちにとって大学、とりわけ専門性の高い東京海洋大学について知ることは、上級学校の学びの広さと深さについてより一層の理解を深め、現在の自己の学びと興味を将来にどのように結びつけていくかを考える貴重な機会となっている。

3. 南陽市における海洋教育の位置付けと教育的役割

3. 1 海洋教育導入の背景「地域総合型教育」

南陽市では、学校教育と地域の教育機能との連携を図る「地域総合型教育」を平成 17 年から推進し、市民総ぐるみで取り組んできた。「地域総合型教育」とは、社会的・時代的要請である、子供たちの公共性や社会性、規範意識や道徳性の醸成、将来の日本と地域を担う公民としての実践力、国際社会を生き抜くための確かな学力の向上、といった従来の学校教育の枠内では解決困難な教育課題に対して、地域の個人や団体の持つ教育力を活用し、連動、一体化しながら教育成果を高めていく取り組みである。本教育が意味する「地域」とは南陽市だけに留まらず、広く置賜地方、山形県、東北と同心円的な広がりを見込んでおり、各種の教育課題に対し指導體制や教育方法を都度、柔軟に選択しながら教育の展開を図っている。本市と同じ置賜地方に位置する米沢市からは山形大学工学部の白色有機 EL 研究開発チームを招聘し、世界最先端の研究の一端を紹介して頂いている。子供たちからは、中央に行かずとも地方に居ながら世界最先端の研究を学ぶことが出来るとの感想が聞かれ、「地域総合型教育」の効果を実感している。

こうした経緯の中、平成 27 年に東京海洋大学海事普及会が地方巡回活動の一環として本市赤湯中学校を訪問し、中学生との交流会を開催した。普段見聞きすることのない「海と船の話」や手旗信号体験に生徒、教員ともに大きな興味を寄せていたが、とりわけ練習船実習の紹介については「大型練習船に乗り込み海と船を舞台に学ぶ若人たちの姿は、日本が海に囲まれた海洋民族であることを一瞬にして気付かせてくれた」と大変好評であった。交流会を契機に、本市では「地域総合型教育」の枠を全国へと広げ、日本海事広報協会をはじめとする日本中の海事海洋関係者を招聘し、全国初となる内陸での総合海洋セミナーを開催し続けている。

3. 2 海洋教育の位置付け

平成 29 年 3 月告示の新学習指導要領はその総則の中で、これからの学校教育に求めるものとして「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」といった『主体的・対話的な深い学び』を挙げている。特に学校には、従来までの「何を教えるのか」だけだったものに加え「どう教えるか」という視点、更に「それが社会でどう生きていくのか」という視点の追求も重要視されている。

これらの点において海洋教育は、学校で学んだ自己の知識やその応用がどのように地域や産業そして世界に繋がっていくのか考える場面となり得るものである。海運や造船、港湾等の海に関わる仕事は日本経済を根本から支えている。子供たちが社会構造をその根本から学び、それらを現在の生活や故郷南陽市に繋げて考えることで、自己と社会との結びつきや関わりを意識することになるであろう。そこに生まれる疑問や問いに向かい、学び続けるスパイラルを築くことにより、自力解決力の醸成に繋がるのである。また、海には

人類の未来を照らす未知の資源が数多眠っている。そういった未解決の課題という要素にも子供たちが学びたくなる、未来を作りたくなる魅力が含まれているのである。

学習指導要領および南陽市総合計画の改訂に合わせて、本市教育委員会では平成 29 年 4 月に第五次南陽市教育振興計画の後期計画（2017～2022）を新たに策定した。平成 27 年の海事普及会巡回活動、平成 28 年のセミナー初開催を踏まえた後期計画では、「海洋教育事業の推進」を地域総合型教育および進路指導において推進すべき具体的施策の 1 つに掲げている。南陽市は今後も継続的に海洋教育に取り組んでいく方針である。

3. 3 海洋教育に期待する教育的役割

南陽市が海洋教育に期待する教育的役割は 3 つある。1 つは、生徒自身が理数教育や英語教育を体系化し、自己の学びの意識化に繋げるという点である。南陽市では様々な施策によって、理数教育や英語教育の強化を図っている。理数教育であれば、ジュニアサイエンティストプログラム（JSP）事業により、山形大学工学部の教授や学生アシスタントの方々を講師に招聘し、各小中学校で理科、数学の授業を行って頂いている。英語教育では、東北文教大学の教授による定期的な授業開催や、市特設の英語教育アドバイザーによる授業コーディネート、外国語指導助手（ALT: Assistant Language Teacher）の全学校配置等、子供達が意欲的に学ぶ環境を整えている。そこに海洋教育を行うことで、生徒たちは理数教育や英語教育の意義を感じたり、現在の学びと実社会とのつながりを意識したりするようになると期待される。「海は障壁ではなく、大陸との道である」という概念が英語教育の必要性に迫ったり、海に浮かぶ何トンもの船が理数教育の入り口になったりするものとする。生徒の学びの連続性を意識しながら、現在学校で学んでいる教科や理数、英語がどのような形で実社会に繋がり、どのように活用できるのかを思考する動機付けになると考える。

次に、キャリア教育としての役割である。「海洋キャリア教育セミナー」の名の通り、南陽市では海洋教育をキャリア教育の一環と位置付けて実施している。本セミナーは中学 2 年次の 8 月下旬に開催されるが、その直後の 9 月上旬には市内事業所での 3 日間の職場体験学習が行われている。本市海洋教育は職場体験学習との連関を強く意識し、南陽市そして海洋にまで及ぶ幅広い職業観・労働観の醸成を目指して実施している。加えて、内陸部に位置する南陽市の中学生にとって、海を学ぶことは興味深く印象的であり、中には更に海に憧れや希望を抱き、将来海に関わる仕事に就いてみたいと考える生徒が出ることも期待できる。また、直接海に関わる仕事に就かないまでも、自己の将来の夢や希望の職業が間接的に海に結びついていることを、実感を伴って学べることは大変、意義深い。海洋教育が将来の進路選択の幅を広げるばかりでなく、思考の深みを生み自己をみつめる絶好の機会となると期待している。

そして、心の陶冶を通じた情操や道徳的な実践力の強化である。例えば、日本を代表する名作童謡 1 つである『みかんの花咲く丘』の歌詞に、「汽笛がほうと、鳴りました。」という、主人公が遠くに見える海を眺めながら母親を懐かしむ部分がある。これに代表されるように、海や船に関わるものには郷愁や旅愁を感じるものが数多く存在し、大変情緒的で様々な想像が膨らむ。だからこそ、海の広大さや神秘性、魅力が人間の琴線に触れ、子供の心が育つのではないかと考える。自然の法則に従うしかない海を学ぶこと、つまり海

洋教育における擬似体験が生徒の自己指導能力を育み、情操や道徳的実践力となっていくと考えている。加えて、海に携わる人々の心情や仕事の工夫を学ぶことは、自然に感謝し、自然と共生する態度を養うであろう。以上3つの観点から、南陽市では海洋教育に教育的価値を見出し、本市教育課程の中心に大きく位置付けている。

4. 今後の課題と展望

南陽市における海洋教育は、日本海事広報協会をはじめとする海事関係各位のご協力を得ながら、プログラムの改善と改革を重ねてきた。内陸部での海洋教育という他市町村に先駆けた試みも導入から3年が経過し定着を感じるころであるが、その中でいくつかの課題も上がっている。

最も大きな課題と捉えているのは、本市海洋教育の核である海洋キャリア教育セミナーが独立した学びに留まっている点である。むろん、本報告にも記述してあるように、事前学習における海との出会いや事後学習におけるリフレーミング（振り返り学習）等、子供の学びを深化させるための取り組みは、関係各位のご協力を得ながら鋭意努力されてきた。また、職場体験学習とのつながりやキャリア教育の一環としての位置付けにも、大きな意義を感じている。しかし、教育課程の中にどのように組み入れ、理数や英語をはじめとする各教科、各領域とのつながりをどのように意識させていくかというところに大きな課題が残っているのである。もちろん、教育課程編成に関わる海洋教育の中心は、本稿で紹介したセミナーであることに他ならない。その観点に立てば、事前学習と事後学習の在り方も再考しなければならない。以前は、南陽市でも「船乗りの親を持つ子供がいた」ということを聞いたことがある。しかし、現在では生徒たちはもちろんのこと、生徒を指導する教員であっても海や船との接点が全くない者がほとんどである。海に関する風土のない南陽市で、海に接したことの少ない生徒たちが、海を熟知していない教員と共に、海のことを学ぶのは大変、困難である。そうした状況の中で、南陽市の教育の良さである地域や外部人材を登用して教育に有効活用する土壌を利用し、事前学習と事後学習におけるより一層の関係各位との密接な連携に努めたいと考える。また、3年に1度の割合で、南陽市内の中学生全員を対象とした基調講演を実施することも必要である。そうすることによって、海に関わる仕事に対する確かな情報を隔年的に、重層的に子供達に伝えることができると考える。

第二に事後学習としての海洋体験の実施が望まれる。子供は体験を通して学び、感じ、自分の中に得ていく。本セミナーを通して生徒たちは海と出会い、海に関する事柄を学習するわけであるが、「海の仕事」という自然と人に関わる領域であるからこそ、生徒自らが実際の海に身を置き、そこで働く人々と触れ合うことで、本市の海洋キャリア教育セミナーは体系的な学びになると考える。しかし、過密化した教育スケジュールに加え、海から程遠い本市の地勢を考慮すれば、現在の教育課程の中で新たな海洋活動を展開していくのは困難であると言わざるを得ない。すでに取り組んでいる社会科見学や東京での修学旅行の中で訪船や港湾見学といった海と触れ合う機会の設置が望まれる。本市海洋教育のさらなる充実を図るため、是非とも海事関係各位のご協力をお願いしたい。

第三の大きな課題は、海洋教育の成果をどのように検証していくかという点である。生

徒たちはセミナーを受講した4年後に高校を卒業し、進学や就職など各々の進路を歩んでゆく。もちろん、その内の何名が海に関わる進路を選択したのかということは興味深く、検証していく価値もあるだろう。しかし、南陽市が目指している理念や考え方からすると、その数値のみをもって海洋教育全体を評価することは、全くふさわしくない。教育の評価というのは簡単なものではなく、表出しない人間のあり方や生き方への影響という側面を忘れてはならないと考えるからである。例えば、進路相談の際に「いろいろな仕事がある中で、自分は・・・」と発言した生徒がいた場合、海洋教育が子供の思考を広げたり深めたりしている可能性もある。また、自己選択した生き方の中に、海の学びがそのベクトルとして生きている可能性もある。様々な角度や視点から子供達をみつめ、海洋教育がもたらす効果を検証していく必要があることを感じている。南陽市教育委員会では、今後も日本海事広報協会をはじめとする関係各位の協力を得ながら、生徒ひとりひとりにとって実りのある海洋教育となるよう、努力を続けていきたい。

5. 結びにかえて「なぜ内陸の南陽市で海洋教育を行うのか？」

日本の童謡・唱歌である『海』の「海は広いな、大きいな、・・・」という歌詞の通り、海にはその広大さや不思議さ、全世界とのつながりに無限の可能性を感じずにはいられない。地球儀を見れば、日本は海に囲まれた海洋民族だということが一目で分かる。元来、島国に住む日本人にとって海は、生活を保障している生命線ともいえる存在であり、海を「道」として使い、大陸との交流を盛んに行ってきた。歴史上、人類の進化において欠かれない海は、未だ判明していない未知のことを秘めた神秘的なものである。だからこそ、子供達が海に関わることを学ぶ海洋教育には、無限の教育的意義があると考えられる。

山形県南陽市は、海と縁遠い内陸部に位置している。そのため、南陽市の子供達にとって海は、滅多に触れる機会もなく大変興味深い存在であるといえよう。しかし、章題のとおり「なぜ内陸の南陽市で、子供たちに海洋教育を行うのか？」という問いもある。この問いのような発想や考え方は、物事を小さな要素で分析するミクロ的なものであろう。ミクロ的なものの見方は、その物事を改善、改革していく上で大変重要なことである。しかし、それと同時に、全体的な仕組みなどを整理していくマクロ的な視点も、社会の発展や進化には必要不可欠だと考える。過去を紐解くと、鉄の塊が海に浮いたり、まして空を飛んだりするところまでは、ミクロ的な発想では到底辿り着かなかったことであろう。マクロ的な発想をしなければ、物事を発明したり開発したりして、時代を切り拓いたりしていくことなどできない。南陽市は、地理学的に内陸部に位置するわけだが、海辺の地域と何も変わらず海の恩恵を受けている。すなわち、南陽市民一人ひとりにも海洋国日本の一員としての自覚と責任が求められる。

過日、南陽市内中学校3年生のある生徒が「これからは答えのない課題について、自分で答えを創り出していくべき社会になる。このように変化していく社会に、柔軟に対応していけるようにならなければならない。」と語ったことがあった。この発言に象徴されるように、激動の21世紀社会の中で学校教育や社会教育に求められるものは日に日に大きくなっている。その背景には、少子高齢化や人口減少をはじめとする諸課題を抱えながら、世界はグローバル化し、AI時代に突入するという危機感もある。教育界は、そのような社

会構造の変化の時代をたくましく生きぬく子供の育成が今、求められていることに、真正面から向き合わなければならないのである。そのような変化に対応するためには、子供達や指導者の固定的な概念や認識を変えなければならない。学問の根本原理を追求し、社会の中で生きて働く学びを探究していかなければならない。南陽市では、生まれ育った故郷の良さや温かさを感じ後世に引き継ぐ愛郷心を持った人材を育成すると共に、日本人の一員としてこれからの日本や南陽市をグローバルな視点でみつめ世界に羽ばたく人材を育成していく必要がある。海洋教育は海という未知を含むものを探究する学びであるが故に、一人一人の子供の意欲を引き出すと共に、論理的思考力や探求行動力等の下地や素地を創りだし、社会の中で活躍するイノベーション能力等の高度な学力に結びつく可能性を秘めていると考える。

今、文部科学省は海洋教育の推進を打ち出し始めており、今後の海洋教育を取り巻く状況が変化していくことが伺える。しかし、南陽市では海洋教育における理念や根本的な考え方に加え、今日まで積み上げてきた日本海事広報協会をはじめとする関係各位との実践を旗印にして、各論的な課題を改善、改革しながら進んでいきたいと考えている。紹介のとおり本市海洋教育は発足から日が浅く、未だ開発の途上にある。読者各位並びに今日までの海洋教育を牽引してこられた諸賢の忌憚のないご意見とご提案をお願いする次第である。

〈資料〉

第五次南陽市教育振興計画「南陽の教育」(2012～2022)

第五次南陽市教育振興計画後期計画(2017～2022)

謝辞

最後に、本市海洋教育事業に多大なるご尽力とご理解を頂いている公益財団法人日本海事広報協会、公益社団法人東北海事広報協会、国土交通省東北運輸局、一般社団法人日本船長協会、株式会社ヤマニシ、酒田海陸運送株式会社、国立研究開発法人海洋研究開発機構、海上保安庁に心からの感謝を捧げる。